



筑紫女学園大学リポジト

Categorical Approach to Terms of Address

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/469

呼称のカテゴリー分析

－ 自称詞・対称詞・他称詞 －

緒 方 隆 文

Categorical Approach to Terms of Address

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は呼称をカテゴリーの観点から考察し、呼称の生成プロセスを明らかにすることを目的とする。呼称はもともと誰を指しているのか、他と区別するためにある。英語の一人称・二人称のように話し手・聞き手を意味し、無色透明な形で長年使われてきたものもある。しかし実際は、待遇表現の一つとして、状況や相手との関係を考慮した上で、使う呼称が定まることが多い。そのため呼称には、様々な表現が用いられ、使い分けられている。人称代名詞だけでなく、様々なものを用いて話し手・聞き手・話し手／聞き手以外のものを区別する。よって本稿では、一人称・二人称・三人称という用語を使わず、自称詞・対称詞・他称詞を用いていく。自称詞は話し手を、対称詞は聞き手を、他称詞はそれ以外の人を指す呼称になる。

呼称は、呼称全般、個別呼称の分析、他言語と日本語との比較、ポライトネス理論、統計的分析など様々な観点で論じられてきた(鈴木(1973)、国広(1982, 1990)、三輪(2005, 2010)、etc.)。しかし呼称の生成プロセスについて論じたものは極めて少ない。本稿はカテゴリーをもとに生成プロセスを考察する。もっといえば呼称対象をカテゴリーとみなして分析する。呼称対象は、様々な属性を持ち合わせており、その属性をもとに呼称が定まる。呼称対象を、属性を成員とする集合体とみなすとき、一つのカテゴリーと考えることができる。このカテゴリーを通して、生成プロセスを分析する。

以下構成は、2節で呼称表現が待遇表現として使われていることに、呼称マップという概念を導入する。3節では命名プロセスの全体像を示す。ここではカテゴリー分析が用いられる。4節ではそれを具体的な事例にもとづいて考察する。5節では、起点推移をみる。起点推移は従来、虚構的用法と呼ばれていたものに概略相当する。しかし守備範囲を広げ、上位者、対等者への推移も扱うこととする。全体を通して、カテゴリーが呼称の生成プロセスに深く関わることを示していく。

2. 待遇表現としての呼称(呼称マップ)

相手との関係や状況をふまえた上で、呼称が決まることから、呼称は待遇表現の一つといえる。しかし従来の研究で見落とされがちな、重要なことが3つある。1つめは、呼称は固定的ではなく、極めて流動的なことである。夫婦関係一つとっても、いつでも同じ自称詞、対称詞が使われるわけではない。二人だけの時は「まーくん」と呼び、義理の両親の前では「まさるさん」、子どもの前では

「お父さん」、友達の前では「だんな」など変化するのは普通である。また外的な状況だけでなく、内的な精神状態の変化によっても呼称は変わる。例えば、子どもへの呼称で、普通的时候は「たっくん」、怒っているときは「たかし」、しっかりして欲しいときは「お兄ちゃん」など感情によって呼び方は変わる。こうした事実は取り上げられても説明がなされなかったり、記述さえない場合も多い。フローチャートを使い、二択の条件をくり返すことで機械的に呼称が決まるかのような分析もあるが、現実からはほど遠い(cf. Ervin-Tripp 1969)。そのためこうした呼称の流動性をまずとらえる必要がある。

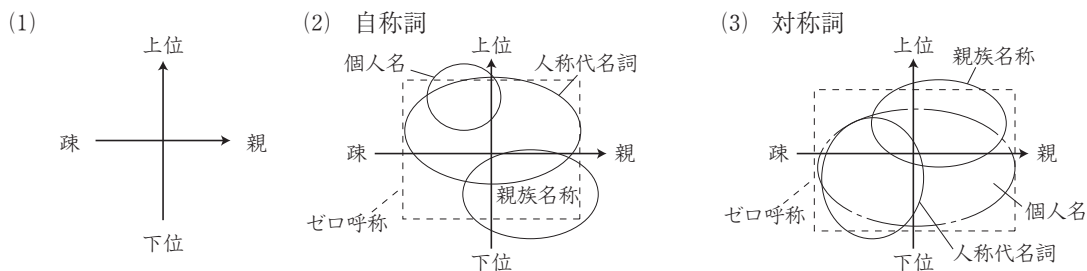
2つめとして、個々人が使う呼称の数は限られているにも関わらず、多様性に富むことである。日本語の自称詞はしばしばその多さが述べられる。例えば「わたし」をとっても、「わたくし」「あたし」「あたくし」「あたい」「わし」「わがはい」「ほく」「おれ」「おいら」「あっし」「こちとら」「じぶん」「てまえ」「しょうせい」「それがし」「せっしゃ」「おら」と言い換えがある(柴田武・山田進(編)『類語大辞典』p.1480)。しかし実際は「わし」「あたい」「こちとら」など使わない人は多い。可能な呼称の中で、実際に個々人が使う呼称の数は、極めて限られている。

一方で、ニックネームなども含め、個々人が使う呼称は実に多様である。例えば夫婦間の呼び方で代表的なものに「あなた」「おまえ」があるが、今この呼び方をする人はほとんどいない。実際、配偶者を何と呼ぶかは、聞いてみないと分からない。国や文化において、ある一定の傾向があるとはいえ、日本語では実に多様である。つまり呼称の数は限られているが、実に多様な呼称が個々人の恣意にまかせて使われている。この限定的な数の多様性もまた説明する必要がある。

さらに3つめとして、必ずしも呼称は使われないことである。とりわけ自称と対称の場合、誰のことを述べているか、呼称によって特定しないことが多い。呼称が現れないことから、これをゼロ呼称と呼ぶ。ゼロ呼称になるのは、相手との待遇関係を、明示したくないからである。そのため他の呼称表現を選ぶのと同じように、意図的な理由を持って選択されている。そのためこれも呼称表現の一つと見なしていく。

上記を説明するために、呼称マップという考え方を導入する。呼称マップとは、横軸に親疎関係、縦軸に上下関係を持つもので、地図のように、ここに呼称が割り振りされる((1))^{*1*2}。同じ呼称対象であっても、状況や感情によって呼び方が変わるのは、呼称マップをもとに呼び分けているからである。このマップには一般呼称マップと、個人呼称マップがある。一般呼称マップは、文化、ないしは言語コミュニティにおいて、おおむね共有される一般的なマップになる。これを土台として、個々人の個人呼称マップが作成される。しかし必ずしも一般呼称マップにそのまま従うでもなく、個々人で異なる呼称を使うのが通例である。各個人によって使用する呼称が異なるのは、個々人の個人呼称マップが異なるからと言える。

この2つのマップには各々、自称詞マップ、対称詞マップ、他称詞マップがある。基本すべて1種類ずつ存在するが、個人呼称マップの対称詞マップと他称詞マップでは、極端に言えば呼称対象の人数分だけ存在する。しかし実際は共通する部分も多く、概略的に1種類示すことも可能と言える。(2)は自称詞、(3)は対称詞の簡単な一般呼称マップの一例をあげている^{*3}。親疎関係は話し手との関係により決まり、上下関係は相手(聞き手・他称対象者)の位置を表している。



(2)(3)はどちらも呼称の一部を例示している。親族名称、個人名、人稱代名詞、ゼロ呼称のみを記しているが、自称詞と対称詞だけを簡単にみても、マップが大きく異なっている。

しかし(2)(3)はあくまで例にすぎない。というのも一般呼称マップ・個人呼称マップどちらも固定的なものではなく、時代、地域、コミュニティによって変化する。例えば、最近では名字でよびあうカップルが増えている。今までは親しくなれば、下の名前であったり、愛称で呼び合うのが普通であった。こうしたことは家族関係においても起こっている。親や祖父母のことを「<名字／名前／あだ名>+さん」で呼ぶ家族が出てきたり、兄や姉を「お兄さん」「お姉さん」など親族名称を使わずに名前と呼ぶ傾向がでてきている (cf. セペフリバディ 2012)。そのため鈴木(1973)でのべられていた原則が、あてはまらなくなってきた感がある。これは人間関係のあり方が、変化してきていることを示しており、それに応じて呼称に変化が起こっている。

3. 命名とカテゴリー

3.1 命名プロセスとしての呼称

前節を踏まえると、呼称は命名プロセスの一つと言える。つまり自分も含めて、個々人を何と呼ぶかをその場で判断し、呼称を用いている。たとえ一時的であっても、その場で個々人の呼び方を命名している。ここで呼称による命名プロセスを、カテゴリーを通して考察する。

では命名プロセスとは何か、が問題になる。命名プロセスとは、カテゴリーのラベル付けと考える。カテゴリーといっても、呼称対象のような人もカテゴリーの一種と考えていく(個体カテゴリーと呼ぶ)。というのも個々人は、属性の集合体から成り立っており、呼称は個々人が持つ属性をもとにつけられる。そのため個々人を、属性を成員とする集合体とみなし、カテゴリーの一種と考える。つまり通例の命名プロセスと同じように、呼称においてもカテゴリーへのラベル付けという命名プロセスが起こっていると考えられる。つまり呼称とはカテゴリーラベルのことであり、呼称の生成プロセスとはカテゴリーのラベル付けと見なす。

ラベル付けの対象が、自分であれば自称詞、聞き手であれば対称詞、それ以外の人であれば他称詞となる。呼称の用法は基本2種類あり、一つは代名詞的用法(referential)、もう一つは呼格的用法(vocative)になる。代名詞的用法は自称詞・対称詞・他称詞すべてにあるが、呼格的用法は対称詞のみになる。

ただし呼称が使われないゼロ呼称の場合、ラベルが満たされずに空のままになっている。これは相手との待遇関係を明示したくないときに使われる呼称になる。空であるため、表現されないことがない。このゼロ呼称も含めて、本稿では呼称と考えていく。

3.2 呼称の命名プロセス

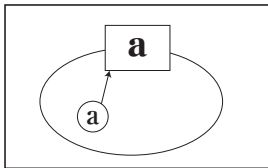
呼称の生成プロセスの概略を述べていく。呼称の生成プロセスは、命名プロセスの一つと述べた。命名プロセスとはカテゴリーのラベル付けであった。そのため呼称の場合も、呼称対象である個体カテゴリーへのラベル付けが生成プロセスになる。呼称の場合、属性をもとにラベル付けが通例行われる。しかしカテゴリーのパターンがいくつかあり、それに応じて生成プロセスも異なってくる。

まずカテゴリーの数が、一つの場合(単数カテゴリー)と複数の場合(複数カテゴリー)がある。単数カテゴリーの場合、(4)のように、成員である属性が活性化され、カテゴリーラベルへと推移する。活性化される属性は、常に同じではなく、状況に応じて違ってくる。状況とは呼称マップであげた親疎関係と上下関係を基本とする。

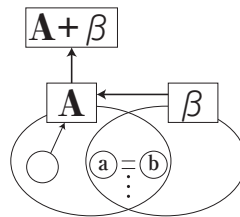
一方複数カテゴリーは、(5)に示す2種類がある。一つは(5a)のように、呼称対象である cat A と別カテゴリー cat β が重なる(以下カテゴリーは cat と表す)。というのも cat A の成員に、cat β の成員と同一視される属性(図では a と b)があるからである。プロセスとして、まず cat A で、活性化される属性があれば、それがラベルへと推移するが、なければラベルは空のまま(ϕ)で活性化される。次に cat β においてラベルが活性化され、それが cat A のラベルに組み込まれる。このとき $[A+\beta]$ となり呼称が生成される。重なった属性部分は活性化されることはない。人称代名詞や敬称などがこのプロセスをとる。

もう一つは、(5b)のような関係呼称になる。呼称対象である cat A が、個体カテゴリー cat B と、関係属性により結びつく。(5b)では兄弟関係を表しており、cat A と cat B 各々の属性、〈兄〉〈弟〉が二重線によって関係づけられており、両者が兄弟であることを示している。呼称対象である cat A の属性〈兄〉が活性化され、ラベルへと推移し呼称となる。「お兄さん」「お兄ちゃん」などの呼称は(5a)のプロセスと組み合わせながら生成される。

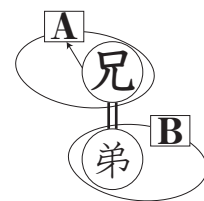
(4) 状況 α



(5) a.



b.



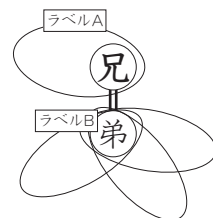
なお関係呼称の場合、通例上位の属性は用いられるが、下位の属性は自称詞や対称詞にならないのが普通である。これは親族呼称に限らず、〈先生〉=〈生徒〉、〈社長〉=〈社員〉など他の関係においてもあてはまる。これには2つ理由がある。一つは、間接性の確保である。滝浦(2007:34)が述べるように「文化人類学的に見れば、人を呼ぶことは間接的に相手に「触れる」ことであり、基本的なタブーに抵触する側面を持つ」。本人の特徴とか名前といった直接的属性は、直接すぎて間接性を保てない。丁寧であるには、少なくとも間接性が高い属性で、上位者を呼ぶ必要がある。2つめは、関係性の確認がある。役職名で呼べば、相手が上位で、自分が下位であることが確認される。そのことで相手を立てることとなり、敬意表現として成立する。一方下位者には、名前などもっと直接的属性の高い属性が選ばれる。呼称対象を固有の属性(名前など)で呼ぶことで、上下関係を明確にしたがり、より近い関係を示すことができる。もし役職名などで呼べば、間接性が増し、疎の関係にあ

ることや、力関係(上下関係)で相手が弱いことを含意してしまう。

しかしながら下位者の属性であっても複数人になれば、自然な呼びかけになる。(5b)でいえば、弟は通例対称詞とはならないが、複数人の場合は対称詞として使うことができる*4。

(6) a. 弟たち、ちょっと手伝って。b. パートさんたち、3時に会議室に集合してください。

この場合、(7)の図のようにになっている。複数の弟たちがいて、それに (7)



共通する属性が〈弟〉しかない。そのため本来活性化されることがない下

位の属性が活性化され、ラベルBへと推移する。

さらに上で述べた3プロセスに加え、起点推移というプロセスがある。

呼称は通例、話し手を起点とし、呼称が定まる。しかしこの起点は、往々にして他者に移動し、その他者を起点として呼称が定まることがある。これを起点推移と呼ぶ。この起点推移した後に、上記3プロセスにおけるカテゴリータイプをもとに、新たに呼称が定まる。

以下、4節で上記3プロセス((4)(5a, b))の事例を、5節で起点推移の事例を見ていくこととする。そこでは呼称の生成プロセスが命名プロセスであり、カテゴリーのラベル付けであることを示すとともに、カテゴリーが深く関わっていることを示していく*5。

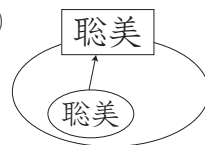
4. 事例(3プロセス)

本節は(4)(5)で述べた3プロセスを、呼称を種類にわけ、具体的に見ていく。

4.1 人名と敬称

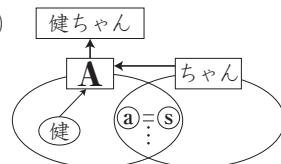
呼称としてまず浮かぶのが、人名である。人名は、他者と区別する属性として、一番明確である。しかし人名といっても、名字のみ、名前のみ、フルネームのみ、それらに敬称がついたものなど多様である。それらの使い分けは大まかには一致するものの、個々人によって異なる。それは個人呼称マップが、個々人で異なるからである。呼称マップ上での使い分けは、親疎・上下関係によって基本なされるが、付加する敬称により特性が色づけされることもある。

ここでの生成プロセスは2つある。一つは最初に名字のみ、名前 (8)



のみ、フルネームのみで、これらは単数カテゴリーにおいて、属性(名前)がラベルへと推移する(4)のパターンになる*6。(8)では個体カテゴリーの属性成員(聡美)に焦点があたり活性化され、ラベルへと推移したものを図示している。

一方敬称がつくものは、(5a)のパターンになる。例として(9)に「健 (9)



ちゃん」のプロセスを図示する。まず cat A(呼称対象者)で、属性〈健〉が活性化されラベルへと推移する。それと同時に cat A と「ちゃん」に同一視される属性があることから、cat A は「ちゃん」カテゴリーと重なる。同一視される属性は一つとは限らず、例えばかわいいとか、親しみがある、幼いなど、状況で重なるものが異なる。そしてラベル[ちゃん]が活性化された後、cat A のラベルに編入され、[健+ちゃん]で「健ちゃん」が生成される。その他敬称も基本同じ生成プロセスになる。

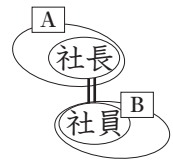
さらにこれは名前に由来するニックネームにも応用される。例えば「よし坊」であれば、名前の「よしお」の音声の一部が活性化されラベルへ推移し、それと同時にカテゴリー「坊」に、同一視される

属性があることからカテゴリーが重なり、ラベル[坊]が活性化される。ラベル[坊]が呼称対象のカテゴリーに編入され、[よし+坊]で呼称「よし坊」が生成される。

4.2 職業名と役職名

職業名もまた他と区別される、目立つ属性である。職業を通して、その人と関わっている場合はなおさらである。「大工さん、台所の相談をしたいんです」などと対称詞だったり、あるいは、他称詞として用いることも出来る。職業名のみを呼称に使えば、(8)と同じ単数カテゴリー内の属性がラベルに推移するパターンとなる。しかし通例「さん」をつけることから、プロセスは(9)と同じになる。職業名という成員属性が活性化され、カテゴリーラベルへと推移する。これと同時に敬意を払う対象であることから、カテゴリー「さん」とカテゴリーが重なり、そのラベル(さん)が活性化され、職業名ラベルに編入され、呼称「(職業名)+さん」が生成される。

これと似たものに、役職名がある。しかし職業名と異なり、これには関係呼称が加わる。関係呼称の場合、(10)のような図で示すことができる。2つのカテゴリーが属性で関係づけられている。(10)では属性<社長>と、属性<社員>が関係づけられており、両者が社長・社員の関係にあることを示している。この関係属性は、上位の関係呼称が使われるのが基本なので、ここでは社長のみが自称詞や対称詞として使われる。



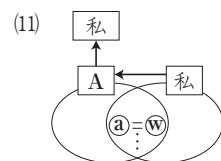
しかし3.2節で述べたように、複数人への呼称では下位の関係呼称が可能になる。「新入社員よ、君たちが我が社の未来を作るのです」など下位の役職で呼ぶことが出来る。複数の個体カテゴリー同士に共通する属性が、下位の関係属性<新入社員>しかないからである。

次に関係によらないパターンが、職業名と同じく2つある。役職名の場合と、役職名に敬称を付ける場合である。前者が単数カテゴリー内の属性がラベルに推移する(8)と同じパターンで、後者が(9)と同じ複数カテゴリーのパターンになる。例えば、雑誌の編集長に向かって「編集長(さん)」と呼ぶのは、関係というより、役職の属性を述べるにすぎない。また「教授」とよぶのも、関係概念ではなく、属性とみる方が自然である。このように、他者との関係で成立する役職語であっても、その部外者からは、単なる属性の一つにすぎない。そのため属性だけがラベルになるのであれば(8)のプロセスになり、「さん」など付加されるのであれば(9)のプロセスになる。

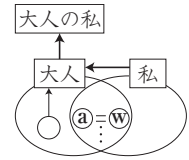
ここでは属性ではあるが、下位の役職名では、上位の役職名が想起され、それより下という意識が働き、敬意表現になりにくい。そのため「??派遣さん」「??准教授」「??非常勤講師さん」「??主任さん」「??班長さん」など明らかに上位者が想定される役職は、呼称として使わないのが普通である*7。

4.3 人称代名詞

人称代名詞の生成プロセスは、複数のカテゴリーが重なるパターンになる。「私」を図示したものが(11)になる。呼称対象である cat A には、活性化される属性がなく、ラベルは空のままである。このとき<話し手>などの属性が同一視されるため、cat「私」(人称代名詞)が cat A と重なる。ラベル[私]が活性化され、それが cat A に編入され、「φ+私」で呼称「私」が生成される。人称代名詞「私」は同一視される属性が少ないが、他は、より多くの属性が同一化される。



この人称代名詞には、属性が前に付加される場合がある。例えば「大人 (12) の私にむかって、その口のきき方は何」などがある。これは(12)に示すように、まず cat A の属性〈大人〉が活性化され、cat A のラベルに推移する。ラベル「大人」に、ラベル「私」が編入されるが、そのままでは文法的に不適格になるので「の」が挿入され、「大人の私」が生成される。呼称の前に修飾語は通例つかないが、人称代名詞の場合、cat A のラベルが空になっているため、付加することができる。



4.4 一般名詞類

ここでは一般名詞及び名詞句、そして評価判断を含む epithet のようなものを扱う。本稿では生成プロセスの解明を目的とするので、意味の分類はあえてしないこととする。ここでは大きく、4種類ある。1つめは(13)のように、単純に属性が呼称になる。これら属性は、その場で一番差異が大きい属性になる。こうした属性には色合いが付くことが多く、評価判断を含むことが多い。ただし epithet のように評価判断を含むものは、「それって誰のこと」と確認が必要なこともあり、他者と区別する呼称としては弱い場合もある。

(13) 「大人は黙っというて」「男は出て行って」「子供は黙っとけ」「アホはしゃべるな」

「部外者は口出しするな」「おいチビ、目障りや」「デブ、席をつめんかい」

なおこれには身分の高い人への(14)のような呼称も含まれる。高貴な属性が呼称となっている。これらは(8)と同じで、属性の一つが活性化され、カテゴリーラベルへと推移したものになる。

(14) your Honour, your Excellency, your Majesty, your Ladyship, etc. (Quirk et al. 1985: 773)

2つめは、属性ではなく、(15)のように部分をさすものがある。これは換喩の一種になる。この場合個体カテゴリーは、属性の集合体ではなく、個体部分の集合体となっている。その中で一番目立つ成員が活性化され、ラベルへ移動する。カテゴリーの中身が異なるだけで、プロセス自体は同じとなる。なお使われすぎて、字義が薄れた(16)も換喩のプロセスを経ていると言える。これらは人を、場所で間接的に表すことで呼称としている。()内は字義を表している。

(15) a. おいメガネ、そこどけ。 b. そこの赤シャツ、立ち上がらんといて。

(16) 陛下(階段の下)、殿下(宮殿の下)、閣下(高殿の下)、猊下(猊座の下)、台下(高樓の下)など

3つめは日本語では例を見つけにくい、(17)のような英語の呼称は、隠喩に基づいている。この場合は(9)のプロセスになる。呼称対象の cat A には、活性化される属性がなく、ラベルは空のままになっている。しかし属性の中に、隠喩のカテゴリーの属性と同一視されるものがあり、隠喩ラベルが活性化される。そのラベルが cat A のラベルに編入されて、呼称が生成される。

(17) honey, sweetie-pie, pig, swine, bitch, crow, baby, son, brother, etc.

なお(17)の最後には親族語が入っているが、これは「息子のような」「兄弟のような」という比喩の使われ方をしていると考える。用法によって、ここに入ると見なししていく。

最後に(18)のような関係呼称がある。図示したものが(19)になる。これらは関係によって成り立つ属性が活性化され、それがカテゴリーラベルへと推移する。これらは4.2節と一部重複する。

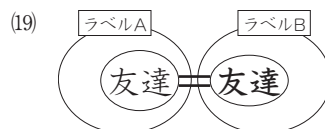
(18) a. 友達を裏切るわけないじゃん。(友達=聞き手)

b. それが客への対応か。(客=自分)

c. それが親への言葉遣いか。(親=自分)

しかしこの関係呼称と(8)のような属性のみの呼称は、区別しにくい場合もある。例えば「先生」という呼称は、関係呼称として、生徒との関係によって使われるのが普通である。しかし医師・弁護士な

どへの呼称としても用いられる。これは「先生」とよばれるだけの属性を持っているための呼称であって、誰かとの関係による呼称ではない。そのため属性のみの呼称と言える。客引き行為で「社長さん」と呼び止めるのも、社員を想定しているというより、客が社長の属性を持っていることを示唆しているに過ぎない。そのため関係を表す呼称であっても、場合によっては属性のみの呼称のときもあると考える。なお属性には一時的属性と継続的属性がある。しかしながら生成プロセスについては違いがなく、同じプロセスで生成されると考える。



4.5 親族名称

血縁関係を伴う親族名称では、基本上位の親族名称のみ使うことができる。この理由は4.2節でも述べたが、1. 直接的属性ではなく、間接的属性(この場合親族名称)を使うことで、間接性を保ち丁寧となり敬意を表現できること、2. 関係を明示することで相手が上位でかつ互いに関係があることを示せることがある。生成プロセスは(5b)と同じで、関係呼称になる。互いが持つ関係属性が結びつけられ、親族関係にあることが示される。しかし上位であれば、制限なく呼称が使われるわけではない。自分または起点者から2節点までが基本となる。これは次節で述べるが、起点推移が起こった場合にはさらに広げることができる。しかしながら起点推移は、親族名称のみにおこる現象ではない。これを次節で見ていく。

5. 起点推移

話し手は、常に自分を起点として、呼称を定めているわけではない。時には、聞き手も含めた他者に起点を置き換え、その視点で呼称を使うことがある。本稿ではこれを起点推移と呼んでいく。代表的なものに、鈴木(1973:162)が「虚構的用法の第二種」と呼ぶ用法がある。これは妻のことを「お母さん」と呼んだり、息子のことを「お兄ちゃん」と呼ぶ用法である。これを鈴木は、子どもの立場、子どもの視点への歩み寄り(共感的同一化)が働いているとした。しかし本稿では、同一化とせず、起点となる自我が推移したと考える。同一化していれば、自分のことを「お父さん」などと対称詞で呼べないからである。同一化ではなく、互いに独立した個であって、共感によって起点となる自我が主観的に推移したにすぎない。そのためこれを起点推移と呼んでいく。

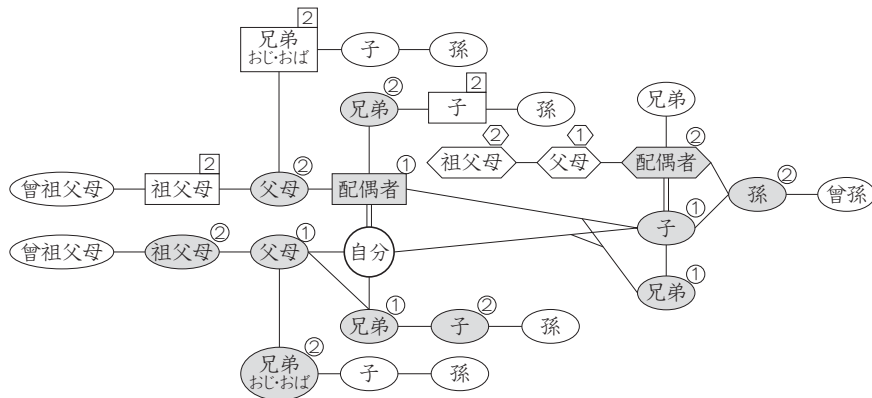
それではどこに、起点推移するのであろうか。鈴木(1973:172)は「目上が目下と対話する時に用いる親族名称が究極的には家族の最年少者を規準点にとり、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、すべてこの最年少者から見て、なんであるかを表わす語で示される」としている。つまり最年少者という下への推移があると述べている。確かに下への推移はあるが、記述が正確ではない。

例えば、息子が結婚し、子どもができたとする。息子の妻の両親に呼びかける場合、孫が最年少者であっても「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼びかけない。「お父さん」「お母さん」と呼びかけるのが普通である。この場合、最年少者である孫は、想定から外れており、最年少者は息子の妻となっている。同様に、弟がいるからと言って、長男はいつでも「お兄ちゃん」と呼ばれるわけではない。

弟が想定に入る場合と、入らない場合があり、入ったときに、「お兄ちゃん」となるのである。この想定されるグループを、想定されるカテゴリーと置き換える。呼称を用いる状況で、想定されたカテゴリーの中で、一番低位の者に起点推移している。ここで最年少者とせず、低位のものとしたのには理由がある。こうした起点推移は、親族だけでなく、年齢・血縁と関係なく起点推移は起こりうる。例えば教師は自分のことを「先生」と自称することができる。これは学生という、より低位のものに推移している。そのため低位とする。

なお親族名称の想定カテゴリーは最大で、自分または起点者から2節点までが基本となる。図は(20)で、自分を中心に2節点までの親族が網掛けになっている。ただし配偶者その他に起点推移することで、同様の親族名称が使えてくる。例えば、自分の配偶者に移った場合、②までが想定カテゴリーへと変化する。また子の配偶者に推移すれば②まで広がる。ただし一部広げることできる。例えば曾孫に対して、自分のことを「ひいじいちゃん」と呼ぶことは可能である。また同時に配偶者の曾祖父母を「ひいじいちゃん」と呼ぶことは可能である。しかしながら横の広がりも厳しく、いどこの場合、たとえ年長者であっても、呼ぶ呼称はなく、「(いとこの)おにいちゃん」などの別の親族名称で代用する。また兄弟の孫に起点推移することはなく、呼称自体がない。また配偶者の祖父母を、自分の祖父母として紹介することは基本できない。そのため親族名称を呼称として使う範囲と、起点推移できる範囲は、基本2節点までと考える*8。なお配偶者に起点推移するのは、夫婦一体化していると見なすからと考えられるが、それでも「妻方の祖父」「夫方の親」と起点推移していることを示す表現もある。

(20)



また起点推移の方向も問題となる。起点推移には、方向性があるのだろうか。鈴木(1973)では、最年少者と同一化すると考えている。つまり下位者への起点推移のみを考えている。しかしながら本稿では、推移は、上位者への推移、対等者への推移も同様にあると考える(実例は後述)。それは起点推移が、一般的な現象であることを意味している。以下具体的に見ていく。

5.1 親族名称での起点推移

先ほど親族名称について簡単にみたが、ここでもう少し詳しく見ていく。親族名称での起点推移には3種類ある。1つめは親族関係にある下位者への自己推移になる。鈴木(1973)の「虚構的用法の第二種」に相当するもので、想定するカテゴリーの中で最年少者に起点推移する。例えば息子に

対して、息子本人を「お兄ちゃん」と呼んだり、自分を「お父さん」と呼んだり、妻のことを「お母さん」と呼んだり、父を「おじいちゃん」と呼ぶ用法である。呼格的用法でも使えるし、代名詞的用法でも使える。血縁関係のある親族内での推移になる*9。自分よりも下位のものに単に推移するにすぎず、推移先の対称が眼前にいる必要はない。しかしここでよく見ると、起点を推移した後に見た呼称対象の親族名称(属性)が、そのままラベルへと推移している(cf. (5b))。

2つめは、親属関係のない聞き手に起点推移する。この場合、推移先は下位者とは限らず、対等者や上位者のこともありうる。例えば知人に「お母さんは何をしています人ですか」などと、もっぱら他称として現れる。しかし推移先の起点者が明確な場合、呼びかけとしても使われる。「お母さん、お子さんのことでお話があります」「お父さん、忘れ物をしていますよ(三者面談の後、呼び止める場面)」。「妹さん、どうかお構いなく(友達の家で)」。「弟さん、相続権は法律通りになります(弁護士が依頼人家族に)」などの例がある。例から分かるように、下位の者に対しても、親族名が使われうる。これは鈴木(1973)で出された規準に対する反例になる。またこうしたことは、血縁関係のない配偶者の親族に対しても起こりうる。そのため親族名称は、誰への呼称かで使われ方が異なってくるといえる*10。

3つめは、親族の虚構的用法に相当する。血縁関係にない他人を「おじさん」「おばさん」「おばあちゃん」などと親族名称で呼ぶ用法である。鈴木(1973:159)はこれを「話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら、自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称詞または自称詞に選んだものと説明している。確かに、おじさんから「おじさん」と呼ばれるのには違和感があるし、同年代の知らない人から「お母さん」と呼ばれるのも不自然である。しかしながら若い女性に「お姉さん、何か落とされましたよ」とか、公園で遊ぶ子どもに「お兄ちゃん、一人で遊んでいるの」と呼びかけるのは自然である。この場合面識がなく親族関係を知らないのに、実在する親族に起点推移し起点者とする用法2とは異なる。ここでは、虚構の親族を想定し、その親族に起点推移し、そこを起点として呼称するものと考え。しかし想定する親族が、親族名称によって異なっており、例えば「おじさん」「おばさん」であれば自分と同年代の親族を想定し、「お兄さん」「お姉さん」では対象者より低年齢の親族を想定することとなる。

ただこれは虚構の親族を想定するのではなく、ただ単に、その親族名称の典型的な属性を持っているに過ぎない場合がある。例えば露天で、「お父さん、食べて行きなよ」などは、子どもがいていい年齢で、そうした風貌をもとに「お父さん」という呼びかけがなされている。つまり同じ親族名称を用いていても、発話者の意識によって生成プロセスが異なってくる。

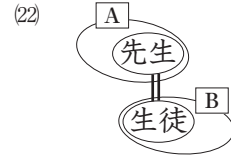
5.2 職業名称での起点推移

職業名にも、起点推移がおこる。例えば、学生に対して、教師が自分のことを「先生」と自称することがある。これは学生に起点推移し、学生が起点者となるため、自分のことを「先生」とよぶことができる。これは下位者への起点推移になる。

ただこの起点推移は自称のみ可能である。ただし自称であっても(2)のように他の属性を追加できない。人称代名詞の場合、「大人の私」とできたのと対照的である。これはプロセスが異なるからと考える。関係呼称の場合、関係概念を通して起点推移したため、関係概念のみが活性化される。そ

のため、その他の属性が活性化できないためと考えられる。

- (21) a. *英語の先生はそうは思わない。
 b. *担任の先生はそうは思わない。
 c. *大人の先生はそうは思わない。



一方対称・他称では、(23)(24)のように属性の追加は普通におこる。

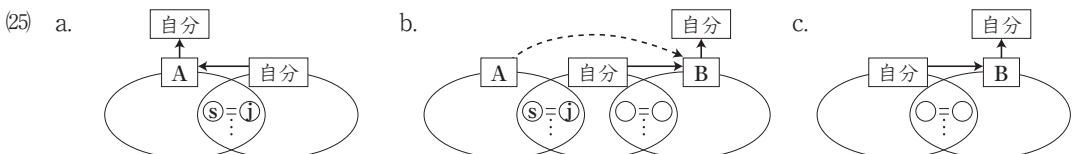
しかしすぐ気づくことであるが、これらは関係呼称ではない。呼称対象の属性を述べている。つまり単数カテゴリーの(8)のプロセスと言える。確かに関係はあるが、関係ではなく、属性の方をより意識している。そのため属性の列挙、あるいは属性の細かい特定が可能になっている*11。

- (23) a. 英語の先生、質問があるんですが(例：塾の全教科入試解説)。
 b. 担任の先生はどう思われますか(例：話者が校長)。
 c. 美人の看護婦さん、お願いがあるんよ(例：話者が老人)。 [対称]
- (24) a. かかりつけの医者が、留学した。 b. 数学の先生が、課題をたくさん出した。 [他称]

5.3 対等者への起点推移

ここでは対等者への起点推移を考察したい。すでに5.1節の親族名称の2つめの用法に対等者への起点推移があると述べたが、それ以外にも典型的なものに、自称詞を対称詞として使う用法がある。それは聞き手である対等者への起点推移になる。代表的なものに、「自分」「おのれ」「手前」「われ」「ぼく」などがある。こうした表現は、自称詞・対称詞・再帰代名詞の間で揺れ動く。また時代によっても、地域や方言によっても使い方が異なってくる。

これらは関係呼称ではなく、次のような生成プロセスになる。まず起点推移していない「自分」のプロセスは(25a)のようになる。話し手である呼称対象 cat A に、活性化される属性がないため、ラベルが空のままになっている。しかし属性の中に、cat「自分」の属性と同一視されるもの(話し手)他)があり、カテゴリー同士が重なる。このときラベル「自分」が活性化され、cat A のラベルに編入され、「 ϕ +自分」で呼称「自分」が生成される。一方、聞き手に起点推移する場合は、(25b)のようになる。聞き手に起点推移した後で(破線で表示)、「自分」という呼称を引き継ごうとするが、条件が働く。カテゴリー「自分」の中に同一視する属性がなければならないという条件である。cat A と自分は、すでに重なり、半分同化しているので、cat A が持つのと同等レベルの属性が要求される。実際、上位者に対して「自分」とは呼びかけられない*12。他の呼称も同じで、その呼称が持つ何らかの属性をもったと見なされたとき初めて、起点推移することができる*13。



ここであげた呼称は基本、対称詞として使われるが、「自分」のように再帰代名詞の用法を持つこともある。これは(25b)での起点推移の意味合いがなくなり、(25c)のように呼称対象 cat B と「自分」で同一視するものがあれば、「自分」を呼称として使えることを意味している。cat B には、話し手・聞き手・それ以外の者になることができる。

なお「おれ」のように、本来二人称であったものが、一人称として使われるものもある。これは基本(25b)と同じプロセスだが、話者と聞き手が入れかわる(cf. 藤井 2011:78)。また大阪弁にこれと似た用法がある。田辺聖子は『大阪弁ちゃらんぽらん』の中で大阪弁の特徴を3つあげている(pp. 164-165)。その中に自分のことを、他人風な言い廻しをすることとして、『ちょっと待てや、おい、ワシにも言わしたれや』の例を挙げている。これは聞き手に起点推移した用法と考えられる。

5.4 上位者への起点推移

上位者への起点推移には主なものが3つある。1つめは小さい子どもが、自分のことを上位者が呼ぶ呼び方で自称することである。例えば「ともちゃんはこれにする」「まさみはいらない」などがある。これは上位者に起点推移することで、依存関係を確認し、いわば甘えた関係を確認している。これは上位者への対称詞として、親族名称とか関係概念(「お兄ちゃん」「部長」等)を使って、関係を確かめるものと基本同じである。2つめが、部下が上司に向かって、自分を苗字で自称するものになる。例えば、「佐藤に任せてください」などという表現がある。強い指揮権を持つと想定した相手に起点推移し、実際呼んでいるかどうかは別にして、苗字のみという強い呼称で呼ぶことで上下関係を明確にするとともに、疎の意味合いをも表現している。3つめは、自分の父親が祖父を呼ぶ呼び方をそのまま真似をして、祖父などをその呼称で呼ぶ用法がある。英語では祖父の呼称として Papa など本来父を表す呼称を使うことができる(國廣 1982: 4)。この場合、自分の父に起点推移している。クレヨンしんちゃんが、お母さんのことを「みさえ」と呼ぶのは、父親であるひろしに起点推移し、ひろしのみさえへの呼び方「みさえ」を真似しているからである。これはいわば背伸びした使い方であり、本来使えない呼称を使うことで、一種のおかしみのある用法といえる。

6. まとめ

ここでは呼称をカテゴリーの観点から考察し、呼称の生成プロセスを考察した。呼称の生成プロセスは、(4)の単数カテゴリーでの属性推移と、(5)の複数カテゴリーの2パターンがあり、これら3つの生成プロセスを基本とした。これに加え、起点推移があることを示した。起点推移は下位者だけではなく、対等者、上位者にも推移することを見た。本稿では主として日本語の呼称を見てきたが、英語の呼称にも適用できるかどうかは別稿に譲ることとする。

【注】

- * 1 より細かい条件は、呼称それ自体が持つと考える。とりわけ後述する複数カテゴリータイプ(5a)において、同一視される属性により制限がかかると考えている。
- * 2 敬語の使用基準が、上下関係から親疎関係に移行している感がある。しかも親疎関係において、疎の関係を好む流れにある。そのため昔より偏った呼称マップに推移していくと予想される。
- * 3 (2)(3)は実証的な研究により、より正確なマップが完成すると考えられる。
- * 4 義理の兄弟の場合や、他人の兄弟の場合には、「弟さん」「妹さん」と対称詞として使える。これは呼び手との直接的な関係でないため、単なる属性としてとらえられている感がある。
- * 5 属性を表す語に、カテゴリーラベルになるものとならないものがある。例えば「先生」は対称詞として使えるが、「教師」は対称詞として使えない。語が持つ何らかの属性(例えば口語体など)が、呼称になるならないを決めていると考えられるが、ここでは深く論じないこととする。

- * 6 酒井(1995:91)は、女性が他人に呼ばれる場合、主に①苗字で呼ばれる人と②名前で呼ばれる人がいると指摘する。これは呼称対象が持つ特性によって、微妙に親疎関係に違いがでて、呼称が使い分けられている。(酒井順子. 1995.「オワ」『トイレは小説より奇なり』集英社文庫. pp. 90-96.)
- * 7 本社から支所に視察に来たときとか、パートで本雇いでない役付きの人を呼ぶときに、「主任さん、ちょっと来て」「パートさん、ここ掃除して」といわば疎の関係で呼ぶことがある。ここでも関係というより、やはり属性の一つとして呼んでいるに過ぎず、役職名にすぎない。他社の社長を呼ぶときに「社長さん」と、「さん」をつけているのも関係概念ではなく、属性呼称であり、疎の関係を保っている。自分の社長に向かって「社長さん」と呼ぶことはなく、他人行儀な感がある。
- * 8 むろん例外もある。曾孫に向かって、「ひいじいちゃんに何でも言うてや」と自然に用いることができる。しかし世代は3世代が普通である。そのため、こうした範囲が暗黙となっている。
- * 9 呼格的用法で使えても、「お袋」のように起点推移できないものもある(cf. 鄭 2003)。
- * 10 「嫁」は本来「自分の子どもの妻」「他人の妻」など意味するが、西日本の地域において自分の妻のことを指せる。同様に「奥さん」も本来他人の妻を指すが、自分の妻をさせるようになった。起点推移による意味変化であろうが、意味の変容が固定した例に思われる。(cf. 北原 2007:78)
- * 11 4.3節では自称詞でありながら、人称代名詞に属性が付加できた。そこでは関係呼称ではなく、別のプロセスであった。そのため自称詞であるから属性が付加されないわけではない。
- * 12 「御自分」と「御」を付ければ、敬意表現となり、聞き手を指すことになる表現もある。
- * 13 人称代名詞「わたし」は(話し手)以外の属性がほとんどなく、起点推移できない。

【参考文献】

- 鄭恵先. 2003.『日本語人稱詞の社会言語学的研究』大阪府立大学博士学位取得論文.
- Ervin-Tripp, S. M. 1969. "Sociolinguistics," L. Berkowitz (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 4. Academic Press, New York. pp. 91-165.
- 藤井洋子. 2011.「日本語の親族呼称・人稱詞に見る自己と他者の位置づけ：相互行為の「場」における文化的自己観の考察」『日本女子大学紀要. 文学部』60, pp. 86-73.
- 石黒圭. 2013.『日本語は「空気」が決める社会言語学入門』光文社.
- 北原保雄(編). 2007.『問題な日本語 その3』大修館書店.
- 國廣哲彌. 1982.「総論」『日英語比較講座』第5巻. 大修館. pp. 1-15.
- 国広哲弥. 1990.「「呼称」の諸問題」『日本語学』9-9. pp. 4-7.
- 三輪正. 2005.『一人称・二人称と対話』人文書院.
- 三輪正. 2010.『日本語人稱詞の不思議—モノ・コト・ヒト・キミ・カミ—』法律文化社.
- 大西智之. 1992.「日本語の自称詞と人稱代名詞 鈴木説再考」『帝塚山大学教養学部紀要』第30号. pp. 26-46.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- セペフリバディ・アザム. 2012.「現代日本語における家族に呼びかける際の呼称表現：世代差と性差を中心に」『一橋日本語教育研究』(1). pp. 61-72.
- 鈴木孝夫. 1973.『ことばと文化』岩波書店.
- 滝浦真人. 2007.「呼称のポライトネス—“人を呼ぶこと”の語用論」『月刊言語』36(12), pp. 32-39.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)